

世代間循環型移住と日系ペルー人の
アイデンティティ形成における差異

スエヨシ アナ

**Intergenerational circular migration and differences in identity
building of Nikkei Peruvians**

SUEYOSHI Ana

『宇都宮大学国際学部研究論集』（ISSN1342-0364）第48号（2019年9月）抜刷

JOURNAL OF THE SCHOOL OF INTERNATIONAL STUDIES
UTSUNOMIYA UNIVERSITY, No.48 (September 2019)

世代間循環型移住と日系ペルー人の アイデンティティ形成における差異

スエヨシ アナ

この研究は日系ペルー人の第1世代・第2世代による日本とペルー間の循環型移住の動機を分析する。それぞれの国の経済的需要に合わせて彼らの期待を適応させることはトリプルウィンに関連する循環運動を生み出す。しかしながら、第1世代目では、循環型移住は食い扶持としての役割を満たし家族に物質的幸福を与える家計経済戦略であるが、第2世代目では、循環型移住は専門的キャリアを積み自己実現の場を提供する。したがって、移住運動は物質的・経済的幸福の源としてだけでなく、精神的・道徳的幸福の源として役立つ。第1世代が世界経済の上下と労働格差における変化に彼ら自身を適応させるという受動的態度を見せる一方で、第2世代は自身の移動性のエージェントになるために言語能力と専門的スキルを利用する。この2世代間の差異はそれぞれのグループがそれぞれの国とそのグループにおけるアイデンティティ形成の過程をどのように認識するかに影響を与える。

1 はじめに

日本社会が直面している深刻な問題の1つは高齢化と低出生率の影響である。入植が人口危機の解決になるという主張がある。この議論の中では、日系入植者は入植のニューウェーブの構成員として言及されるだけでなく、新しい入植者と移住の流れについての貴重な教訓を与える歴史的例として言及される。この研究の文脈において、日系や日系人という用語は日本人海外移住者、その子孫と日本人家系出身でない配偶者に言及している。世界規模の構造的変化は、これらの日系にとって、近年の日本とラテンアメリカ間の太平洋を横断する移住の引き寄せ効果と押し出し効果へのインパクトを持っている。30年前には、南米の悲惨な経済状況は南米日系人に日本へ移住するよう

動機づける主要な押し出し要因であり、そこでは移民政治と労働市場の需要が同調的な引き寄せ力を働かせた。しかし昨今、日本の長引く経済危機、2007-2008年世界金融危機の名残、そしてより小さい範囲では2011年3月の3重災害と、南米における10年間に及ぶ持続的な成長の後には、移住が逆方向に押し出された。結果として、20年以上継続的に成長していた日本に住む南米出身日系人の数は2009年から減り始めた。

この論文はこの移住傾向の一部となった日系ペルー人の経験に焦点を当てる。他の南米の日系人口のように、出稼ぎ（労働移住）の日系ペルー人と日本で生まれ育った日系ペルー人の第2世代も多くがまたペルーに（再）移住した。日本におけるペルー人労働者とその家族の数を明らかにしており、1980年代後半に出稼ぎ現象が始まってから継続的に増加し2008年をピークに減少し始めたという2016まで続く傾向を示していた。2017からわずか1%以下増加している。日本の法務省（2017）のデータによると、2018年6月までの在日ペルー人は48,266人であり、ラテンアメリカからの住民人口ではブラジル人に次いで2番目、在日外国人全体としては6番目に多い位置を占めていた。

移民研究は普通一方向の動きとしての移民、特に南半球から北半球にむけた、社会経済的不平等の空間性によって引き起こされるものに焦点を当てる。しかし、グローバリゼーションは双方向の移民プロセスと循環移動性を引き起こす状況も作り出した。例えば、地理的距離の障害は国際輸送と通信コストの着実な減少によって縮められた。インターネット、モバイルフォン、格安航空は、家族と仲間と連絡を取り合い故郷とリアルタイムで対話することを移民に可能にさせた。循環型移住を促進するもう1つの重要な要因は、受入国に

における移民の適切な法的地位であり、これは時に送出国の政府の支援を受けて確立されてきた。

これまでの移民へのアプローチとは対照的に、循環型移住の概念は同時に永続性と一時性を必然的に伴う (Agunias & Newland, 2007)。さらに、それは「トリプルウィン」として知られるようになった行き先の国、出身地、移住者の目的とニーズに一致する (Newland, 2007)。しかし、循環型移住に関する初期の調査によって扱われた問題に関しては不均衡が存在する。循環型移住と行き先国の役割に関する先行研究は主に移住政策 (Agunias & Newland, 2007; Newland, Agunias & Terrazas, 2008; Fargues, 2008; Zapata-Barrero, García, & Sánchez-Montijano, 2012) やそれらが人権 (Castles & Ozkul, 2014)、人間開発 (Newland, 2009)、ディアスポラ (Agunias & Newland, 2012) に与えるインパクトに焦点を当てた。出身国と移民自身への循環型移住のインパクトを扱う研究では、発展途上国における循環性の影響 (Cali & Cantore, 2010) や移民の社会経済的特性 (Constant & Zimmermann, 2003; Vadean & Piracha, 2009; Zimmermann, 2014) に焦点があてられた。しかし、何世代にもわたる創出国への影響と2地域間を行き来する移民のアイデンティティ形成へのインパクトに特に関連するものは非常に少ない。

本論文では、世代間の側面から見た日本とペルー間の循環的移住について検討する。私は、移住者の人的資源としての可能性と能力、日本に関する理解、日系問題への意識、循環型移住に彼らが付す意味についての世代間の差異に興味を持っている。データは2008年から2016年の間に少なくとも1年に1回、リマの日系学校および日系団体で行われた第2世代日系ペルー人の「帰国者」の間で行われたアンケートと年次インタビューによって集められたものである。インタビュー対象者は日本での生活、ペルーでの適応プロセス、高等教育の経歴、日本との繋がり、日系ペルー人アイデンティティについての質問を受けた。また、2008年、2013年、2014年、2015年、2016年には、子どもたちとその19人の親や保護者とともに彼らの雇用歴や将来設計、日本とペルーでの家庭生活、日系社会とペルー社会での彼らの役割について話した。

この研究は、日系ペルー人の循環型移住が、各世代のアイデンティティ形成にインパクトを与え、ペルー社会に適応するための移行メカニズムとしての日系意識の役割に影響を与える異なる要素を伴うことを示す。世代間の差異は主に異なるスキルレベルに基づいている。第1世代は低スキル移民として関連付けられる一方で、第2世代はむしろ高スキル移民とされる。第1世代の日系ペルー人は出稼ぎ、日系、低スキル労働者という自己言及用語を互換的に使い、家計経済戦略として循環型移住を行う。対照的に、第2世代の日系ペルー人にとって循環型移住は自己実現の手段となり得、日系として自己認識することになり、これはペルー社会における適応過程のための過渡的ステップを提供する。この論文は、世代間の循環型移住における差異と循環型移住の潜在的な利点を暗示することで国境を越えた移住に関する文献に貢献する。移住サイクルを通して異なる場所での移民のアイデンティティ形成と適応過程を調査し、最終的にトリプルウィンの結果が現れる可能性がある条件について尋ねる。

II 循環型移住

学術的文献ではしばしば永久的移住の反対や一時的または非永久的移住と重複したものとして循環型移住を言及している (Cali & Cantore, 2010; Hugo, 2003; Vadean & Piracha, 2009)。しかし、これらのカテゴリは互いに完全には分離されていない。移住者は一時的または永久的に家を去ることを必要とする目的を追っているかもしれない。ほとんどの移住者にとって、非常に若く未婚の移住者にとってであっても、国際的貿易と投資の動態やそれらが地方労働市場に及ぼす圧力に応じて、移住運動は一時的な家計戦略の一部である。ほとんどの移住者は一時的な訪問者として出発し、最終的に永住者になるだけであるので、「一時的」の期間を定量化することは不可能だ。移住の一時性は当初の意図とは異なる可能性があり、目的地の場所が移住者の滞りおよび将来の再入国の法的枠組みを提供しない場合、多くの移住者は一時的に祖国に戻る可能性を放棄することを余儀なくされている。このような状況下では、一時的または永久的と考えられているように、移住は永久的なもの

のになる。この準永続性の状態は入植者が3番目の目的地もしくは出身国に移動することを決心するまで続く。どちらも有力な移動経路である。

1 世代を超えた循環移住

これとは対照的に、循環型移住の概念では、明確な「永久的な」帰還の後でも、潜在的な移動を考慮する。Agunias & Newland (2007, pp. 2-3) は、出発点と帰還点での有効な可能性として永続性と一時性の両方を認める循環型移住の類型論を提案した。彼らは循環型移住を「移住者が単なる受動的参加者ではなく自らの移動性の積極的エージェントである [...] 今や単一の経済空間としてますます認識されているものを占める国家間の継続的、長期的、流動的関係に基づく [...] 異なる動物」(引用者訳)と定義している。この定義を基礎とし、この論文では世代間の観点を考慮することで概念をさらに拡張する。

彼らの祖先の国に渡航することは、新しい国際分業に成功しながら、国内外の運命を逆転させた社会経済的变化に対処する機会を労働移民に与える。第1世代の日系ペルー人にとって、この労働移住への機会は日本人の子孫が優遇ビザを取得することを可能にする市民権の血統主義概念によって促進され、海外移住者の後の世代はこの制度から恩恵を受け続けた。したがって、民族性は世代間の循環的移動を可能にし持続させる法的枠組みを確立するための重要な要素であり、日本に行き、そこに住み、そこで子供を産み、教育するかという彼らの決定に影響を与えた。世代間循環型移動の民族的要素は、時間と知覚距離に関係なく、3つの海外移住、帰還移住、循環型移住の全てをつなぐ糸である。それはまた、「出生国や祖先の国の外に住む、もしくは一時的または永久的な基礎にあるが、依然として出身国との愛情的かつ物質的な繋がりを維持している移民およびその子孫」(Agunias & Newland, 2012, p. 2)と定義される日本人のディアスポラを含む。日系ペルー人移民とその子孫の場合、何年にもわたって維持されてきた国をまたがった繋がりは日本とペルー間の空間を超えるネットワーク創設の基礎を築いた。この空間というのは、グローバル化した世界において非常に重要な意味を持ち、今から100年以上前に

遡るもので、永続的に、あるいは少なくとも民族的繋がりが法的枠組みが存在し続ける限り存続し得る。

2 循環型移住の恩恵

昨今の循環型移住に関する文献は、特に入植者コミュニティが社会的衝突や政府への課題の原因であると見なされ、その経済もまた安価な労働力のための製造業とサービス業の需要に直面している国々にとって、永久移住の代替として循環型移住の恩恵を強調している (Castles & Ozkul, 2014; Fargues, 2008)。したがって、この観点から、受入国の経済と社会は循環型移住の恩恵を受ける。さらに、循環型移住は、労働力への貢献、資本の蓄積、および支出と投資の間接的な効果を通して、送出国および受入国の両方の経済に直接的な経済的効果を及ぼす。送出国の移民家族も、海外から受け取る送金によって恩恵を受ける。その上、入植者は両国の雇用機会から選ぶことができるので、循環性から恩恵を受ける。これこそが、出身国、渡航先国および移民自身を含む、すべての当事者にとっての循環型移住のいわゆるトリプルウィン (Newland, 2007年) です。

循環型移住には、移民に恩恵をもたらすもう1つのポジティブな面がある。それは、自己実現感としての精神的幸福である。これはまた上述したトリプルウィン効果とも関連している。Agunias & Newland (2007, p.2-3) は、移民を「...ただの受動的参加者ではなく、自身の移動性の積極的エージェント」(引用者訳)と呼んでいる。これは移民が、自分の人生設計や専門的目標を実現するのに最適な道のための複数の選択肢から選ぶある程度の自由を所有することを意味する。循環型移住を自己実現のベクトルとして使用することで、彼ら自身の価値観と信念体系によって枠組みされた彼らの能力と意図によって人生計画を追求することができる (Nussbaum, 2011; Sen, 1999)。さらに、Newlandらによると (2008, p. 2)、「循環型移住は出身国と受入国の両方での移民の参画を意味する。大抵、帰還と反復の両方を伴う。」(引用者訳) 物質的幸福を達成するためだけでなく、自己実現を通じて精神的幸福を達成するための明確な道を与えられているとき、移民はこの参画を

達成することができる。

III 日本人と日系ペルー人の循環

日本とペルー間の世代間循環型移住は、19世紀の終わりのペルーへの日本の最初の海外移住者の流出から始まった。明治維新の間の農地改革のような構造的変化は、沿岸のサトウキビ畑で働く契約労働者としてペルーに移住する準備ができていた土地のない失業者を大量に生み出しました。それから数年の間、他の日本人もペルーに引っ越し、すでにそこにいた父親、夫や兄弟と再会した。さらに、多くの日本人女性が写真花嫁として来た。大家族、遠くの親戚、そして出身地が同じ人々は、このような呼び寄せとして知られていた連鎖移住の一部である。日本人がペルーでの滞在期間を延長し、家族との再会が広く行われるようになるにつれて、彼らはペルーに根を下ろし始めた。日本からの移民の流れは1930年代のペルー国内での人種間の緊張の高まりによって中断され、第二次世界大戦によって事実上停止された。中断はほぼ半世紀続いた。

1990年に改正された入国管理および難民認定法により日系移民の日本での在留資格と出国および再入国の権利が保証されたため、ペルーから日本へという反対方向ではあるが移民プロセスは再び勢いを増した。日系人にとって、日本で働くことはペルー経済の浮き沈みの影響を軽減し、脆弱な経済から派生する社会的・政治的問題を避けることを期待した世帯計画の一環だった。約20年の間、日本に住み働いている第2世代と第3世代の日系ペルー人の数は増え続けた。2009年以降の逆行傾向は、出稼ぎ一家および単身の未成年者のペルーへの帰国率の上昇を部分的に反映している。一方では、世界的金融危機によって悪化した日本の長期的景気減速、そして他方では、より良い展望を与えるペルー経済の回復が、それぞれ主な押し出し力と呼び寄せ力となった。研究文献では、日本で生まれ育ち、日本の市民権を持ち、両親や先祖の土地を見たことがないとしても、彼らは一般的に「帰還者」と呼ばれている。

日本からペルーへ、ペルーから日本へ、そして再び日本からペルーへというそれぞれの運動において、移民は通常自分自身、仲間、そして置き去

りにしてきた人々のためにより良い生活条件を求めて太平洋を越えた。しかし、データを詳しく見ると、過去10年間で経済的・道徳的ニーズを満たす最良の国を超えた世帯戦略を見つけるために、日系ペルー人は試行錯誤のプロセスに没頭してきたことが明らかになっている。これが日系ペルー人移民の循環性が高まった主な理由である可能性は非常に高い。

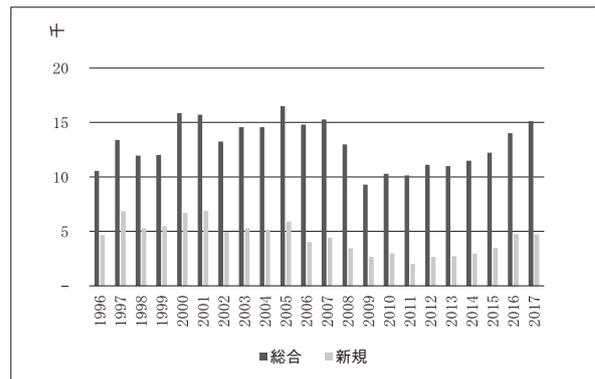


図1 入国ペルー人

出典：法務省

図1は、1996年から2017年間のペルー人による日本への年間合計入国数および年間新規入国数を示している。2000年までは新規入国が合計入国数の40%以上を占めていた。次の10年間でこの比率は平均で30%に低下した。2011年には20%にまでという大幅な減少を記録し、その後2014年まで平均比率は約25%になった。2015年から2017年まで平均比率は30%以上増加した。つまり、過去10年間で、さまざまな理由とさまざまな滞在期間によって、在日ペルー人（大部分は日系ペルー人）の約70%が日本とペルーの間を行き来している。循環性の定量的証拠とそれが時間とともに変化した方法は、世代を超えた循環移住として日系ペルー人移住運動を枠付けすることの重要性を指摘し、循環移住をより動的な観点から分析する必要性を強調すると考える。

日本の第1世代の日系ペルー人移住者は、従事しているので、未熟練者または低スキル移住者として分類されることができる (Castles & Ozkul, 2014; Newland et al., 2008; Fargues, 2008; Zapata-Barrero et al., 2012)。というのも、彼らは厳しい肉体労働に従事し、受入国の言語を話さないからだ。しかし、人口移動としての日系ペルー人移住

は、季節的および非季節的な低賃金労働力移民の特徴と一致していない。多くの文献と大きく異なる点で、在日日系ペルー人移民の第1世代はその民族的繋がりから恩恵を受けた。たとえ彼らが未熟練の移民労働者（出稼ぎ）であったとしても、長期滞在または永住のために家族を連れて行くための特別なビザを彼らの民族的起源は授けた。しかし、第2世代の日系ペルー人はモデルから最も離れている。出稼ぎの子供たちは、両国の労働市場あるいは第3目的国においてさえも能力を提供することができる、専門的なエリートの一員になることを可能にする教育的および言語的スキルを磨く。言い換えれば、第1世代は、低スキル労働移住とある程度の共通点を共有しているが、第2世代は、熟練労働移住とより共通する部分がある。このように、日本とペルーの間の移動の程度と本質は、第1世代と第2世代の日系ペルー人の異なる特徴と動機に依存している。したがって、循環型移住は彼らのアイデンティティにさまざまな影響を与えるだろう。

IV 日系ペルー人：移民、労働、アイデンティティ

以下のセクションでは分析のための経験的なデータを示す。2008年と2009年に、言語能力に応じて日本語またはスペイン語のどちらかで、167人の日系ペルー人学生（小学校レベルで53人、中等学校レベルで114人）を調査した。全ての学生が日本での生活を体験し、調査が実施された時点で日本で働いたことのある、またはまだ働いている親がいた。調査は、日系学校（リマ首都圏にあるラ・ウニオン (La Unión)、ラ・ビクトリア (La Victoria)、ヒデヨ・ノグチ (Hideyo Noguchi)、カリャオ憲法特別市にあるホセ・ガルベス (José Gálvez)、リマ州ワラルにあるインカ・ガクエン (Inka Gakuen)) と日系団体（リマにあるスポーツ組織ラ・ウニオン (Asociación Estadio La Unión-AELU)、ペルー日秘文化協会 (Asociación Peruano Japonesa-APJ)、およびペルー沖縄県人会組織 (Asociación Okinawense del Perú-AOP)、チクラヨ市にある日本人協会 (Sociedad Japonesa de Auxilios Mutuos)) で実施された。

回答者は、基本的な個人データと、日本での生活、その後のペルーでの生活、および日本とのつ

ながりについての情報提供を求められた。167人の学生のうち、8歳以上の128人も平均45分の半構造化インタビューで調査された。2010年と2016年には、日本からペルーへの日系ペルー人の子供たちの流れの動向を追うために追跡調査を実施した。この調査は、高等教育機関に入学した、または最近卒業した「帰国者」にも実施された。

2013年3月と8月から9月にかけて、そして2014年3月には、高校卒業後ペルーに戻った32人の帰国者と、高等教育を終えた2008年から2009年の調査の23人の元インタビューをインタビューした。専門的キャリアプラン、異なるキャリアパス間の意思決定、日本での教育と生活経験がキャリア決定にどのような影響を与えたかを知るため卒業生にインタビューを行った。最後に、高校生が高等教育の入学試験準備を始める卒業半年前である2015年8月から9月にかけて、そして高等教育レベルの学年が始まったばかりである卒業後2ヵ月後にもう一度、ラ・ビクトリア日系学校の学生16人にインタビューをした。さらに、第1世代の日系ペルー人移民について情報を得るため、2008年、そして2013年から2016年にかけて19人の両親と保護者にインタビューした。

1 日本での仕事

日系ペルー人世帯主の多くは日本に留まり、日本の工場での低スキルな仕事に行きつく。仕事は彼らの私生活やと家族生活の中心であったため、一般的に彼らにとって日本は物質的もしくは経済的幸福の源を象徴していた。私が2013年にインタビューした、日本で16年間過ごしたある父親は、彼の人生は完全に仕事を中心としていたと述べた。

5年連続同じルーチン。仕事、仕事、仕事、週に1日だけ休み、そしてまた同じこと。あれは人生ではなかった！

日本で24年以上過ごし、2013年にインタビューを受けた3人の女兒の父親は、次のように述べた。

ペルーでは社会学を勉強していたが、卒業する1年前に大学を辞めた。仕事をしなければならなかったからだ。私は自動車部品店で販売員として働いていたので、そのようなほとんど社会的でないやりとりや反復的な作業には慣れてい

なかった。[日本では]私は生産ラインで機械を操作するだけだった。

彼はまたこう述べている。

日本にいる年月にもかかわらず、私はまだ帰国することを良いと考えていない。日本には慣れてきたが、定年退職したときには[ペルーに]戻ってくると思う。私はまだ仕事ができる限り日本に留まり続けるつもりだ。

これらの証言は、日本に留まることは主に労働市場への参加に関連していること、そして彼らを日本に留める理由は仕事以外にないことを示している。たとえ日本での仕事が経済的報酬以上の意味を持っていなくても、仕事を遂行することで大黒柱としての役割への期待を満たすことができる。したがって、彼らは自分自身だけでなく彼らの家族のためにも、達成感と精神的で道徳的な幸福を見出す。第1世代のインタビュー対象者のほとんどは日系人の子孫であり、何人かは日系人の配偶者であった。彼らに日本への最初の旅行、関連書類、そしてブルーカラーの苦労について尋ねたところ、証言は似通っていた。前述のインタビューは次のように述べている。

私は4人の兄弟と一緒に日本に来、後に私の姉妹のうち2人が加わった。私の叔父は日系旅行代理店に知り合いがあり、その人が私たちのために仕事、住む場所、航空券など全てをしてくれた。私たちは私の日系家族とは親しくなかった。私の父は日系人ではなかったので、私たちは差別されていたと思う。

リマでは、出稼ぎ現象に対応した全ての事業は日系人コミュニティの中で行われていたため、その正会員は未熟練労働者の流れに参加していた。「周辺」日系人にとっては、何らかの理由でペルーの日系コミュニティの活動や出来事と密接な関係がないが出稼ぎとして日本に行く日系ペルー人は、祖先の国との、最初ではないにしても重大な出会いだった。いわゆる「周辺」日系人のほとんどは、日系人以外の配偶者がいる世帯に属しており、そのため子供たちは日系人と日系人以外の親を持っていた。このような混合世帯は、日系家族、親戚、または他の日系人コミュニティのメンバーによって常に受け入れられるわけではなく、日系人コミュニティから身を隠す人もいた。この許容

の欠如は、これらの混合組合による排除や拒絶行為として認識され、その構成員は日系人コミュニティによって差別されていると感じていた。そのような「周辺」日系人は、彼らの祖先を家計経済戦略と結び付け、国を超えた労働市場へのアクセスを得ることによって、恐らく初めて彼らの民族性を利用することができた。

在日日系ペルー人の第1世代にとって、日本にいたことは低スキルの仕事と密接な関係がある。したがって、移民は出稼ぎと互換的に言及された。この用語は規則性と繰り返しを意味するので、移動性にいくらかのダイナミズムを与える。日系人であるということは出稼ぎを意味し、そしてそれはそのまま低スキル労働者を意味する。自分たちの人生や日本およびペルー社会における彼らの立場に影響を与えるこれらの用語の否定的な含意にもかかわらず、日系人、出稼ぎ、または低スキル労働者であることは、家族を食わせ子どもを育てることを可能にした。インタビューのうちの1人である、2人の女兒と1人の男児の母親はこう述べた。

私は日本で21年間過ごしてきたが、ありがたいことがたくさんある。日本で常に仕事があることにとても恵まれていると感じており、その仕事によって私は3人の子供を日本の学校に行かせ、日本で高等教育が終わるまで彼らを支援することができた。

この母親は世帯主でもあり、ペルーの食品製造業の技術者として働いていた。日本では地位と職業を諦めなければならなかったが、日本での出稼ぎとしての仕事は、3人の子供たちに義務教育を受けさせるだけでなく高等教育も提供するという夢を実現することを可能にした。大黒柱としての自己実現と引き換えに、そして世代間上方移動と関連している子どもの専門的自己実現のために、彼女は自身の専門的自己実現の計画を放棄しなければならなかった。このように彼女の発言は、世代間の社会的流動性と第2世代のためのより良い未来への希望と、そのために第1世代の日系ペルー人が自己犠牲をし、自己実現のための自身計画を断念したことを表現している。

2 ペルーに戻る

「帰還」と「帰還者」という用語は、出稼ぎ現象の初期に広く使われていた。しかし、日本人海外移住者の子孫は日本に来たことがなく、日本文化や習慣を理解せず日本語を話すことができないと人々が気づくにつれて、あまり使われなくなった。ペルーに到着すると、出稼ぎの子供たちは両親の故郷であり国籍を持っている土地に戻ってきたので、「帰還者」とも呼ばれた。しかし私の調査結果によると、ペルーで生まれたのは半分だけであり、残りの半分は日本だった。前者のグループの多くは未就学児の頃に、両親と暮らすために日本に行きた。ほとんどの子供たちにとって、日本は彼らが知っている唯一の国であり、日本語は本当にコミュニケーションをとることができる唯一の言語である。

言語の壁以外にも、ペルーに到着した多くの「帰還者」は、新しい環境の安全性、安心、そして衛生状態に主に関係する異なる程度の文化的ショックを経験した。彼らの家庭生活について尋ねられたとき、「帰国者」の子供たちは日本での生活を強く好むことを示した。70%以上が日本が「好き」または「とても好き」と答え、ペルーについて尋ねられたときには同じ答えは60%未満だった。日本を好む理由には「日本の街や通りは清潔だ」、「道にゴミがない」、「街が安全だ」、「泥棒がない」、「自由に外出できる」、「人々が規則に従う」といったものが含まれる。一方で、ペルーでの家庭生活に関して、彼らはこのように述べた。「ペルーの街や通りは汚い」、「通りがゴミで溢れている」、「街が危険だ」、「泥棒が多くいる」、「街が安全ではないので自由に外出することができなかった」、「誰も規則を守らない」。これらの発言は、これらの子供たちが日本滞在中に慣れ親しんできた環境の重要性と、両親の故郷への「帰還」によって周囲がどのように変化したかを示している。日本では、彼らはより清潔な環境での物質的幸福だけでなく、より安全な環境での精神的幸福も享受していた。日本で育ったペルーの子供たちにとって、ペルーは安全な環境でも安心な環境でもなかった。心の安らぎと不安のなさを示すこれらの概念は、日本の精神性において非常に重要であり、世代を超えて教育によって継承される。したがって、

ペルーへの移住はこれらの期待と精神的幸福の源を台無しにした。

第2世代の日系ペルー人にとって、日本であろうとペルーであろうと、彼らの生活は大抵学校生活を中心としている。両親がペルーに帰国することを計画していなかった生徒は、帰国の影響を最も受ける。「帰国者」がペルーの学校に入学するにはスペイン語の習熟度が重要な要素だが、多くは学校での授業や日常会話に必要なスキルを身につけていなかった。しかし、他の帰国子女と出会った場である日系学校や日系人組織に通うことで彼らの不安感は緩和された。

放課後、私は AELU (*Asociación Estadio La Unión*) に行き、そこで他の帰国者とぶらぶらする。私はスポーツを練習しない。多くの帰還者が行くので私も行っているだけだ。夏休みの間であってもそこに行く。そこは安全だと感じるし自由を感じる。そこは両親が1人で行くのを許してくれる唯一の場所だ。

これは2015年にインタビューした16歳の男子学生の発言だ。他の多くの若い「帰還者」やその両親と同様に、彼は日系組織を安全な場所であると考えている。日系学校や日系組織にいることは、彼や他の人々にペルー社会では見つけることができない安全性と安心感を与える。彼らは慣れ親しみ享受し続けたい環境を切望し、ペルーにおいて以前の日本での生活を再現することに熱心だった。2008年にインタビューした15歳の女子学生は、次のように述べた。

ペルーに戻る前に、スポーツ施設がたくさんあり日本の学校のように見える、ラ・ウニオンのような日系人学校に入ることを約束してくれる場合にだけ帰国することを受け入れると両親に言った。ラ・ウニオンにいと、まるで日本にいるような気分になる。

同じ学校の別の15歳の女性学生はこう言った。私は昨年までアカデミア・デ・クルトゥーラ・ハポネサ (ACJ) にいた。その学校にいたとき、日本にいるように感じていた。ラ・ウニオンにいて、今でもまだ日本に親しみを感じる。なぜなら他にもそこにいた生徒がいるし、日本語を学ぶことができるからだ。しかし ACJ ではただ「日本に」いるような感じがした。

アカデミア・デ・クルトゥーラ・ハポネサ (ACJ) は、ペルーのリマにある日本人学校であり、両親が外交、ビジネスや教育ミッションに携わっている日本人駐在員で、日本語を母国語とする小中学校教育を提供している。したがって、学生が ACJ で似たような学校環境を経験したことは非常に自然なことである。日系学校で話した学生のほとんどは、たとえ日本語しか話せなかったとしても「帰国」後すぐに授業に出席することができた。その意味で、これらのペルー社会の「帰還者」の子供たちの適応プロセスにおいて、日系学校や日系人組織が果たす役割はきわめて重要である。

3 異なる世代のための循環型移住：家計戦略と自己実現

理論的には完璧な法的枠組みによって日本とペルーの間を自由に移動することが可能になったので、循環型移住は第1世代の日系ペルー人に国を超えた世帯戦略の成功の可能性をもたらした。しかしながら、人的資源としての彼らの能力と資格はそうすることを阻んだ。インタビューから、循環性、すなわち繰り返しが、ペルー移住での失敗を修正すること、あるいは災害や危機の際に他の国への逃避を可能にただけであることが明らかになった。

私は、父は日本で働き、母と娘はペルーに住む形で2006年まで別居していたある家族と話した。その後、2008年にペルーが娘の教育により良い学校環境を提供することができると決心するまで、彼らは日本と一緒に住んでいました。その後、2014年に父親がペルーに戻ることを決心する前に、母親と娘は2回日本の父親を訪問した。しかし、私が2015年に母親にインタビューしたとき、彼女はこう言った。

夫は去年ペルーにおり、永遠にここにいることを計画した。ご存じのとおり、私たちは私立大学の授業料を支払うことができないので、娘は公立大学に入学した。娘と私は彼女の入学後夫は私達と一緒にいることができると思った。しかし、彼はここで仕事を見つけることができず、また日本に帰らなければならなかった。

私は2013年に1人の男児の父親とも話をした。彼が初めて日本に行ったのは20代前半だった。後に彼は婚約者と結婚するためにペルーに戻り、それ

から1995年に日本に帰国した。彼はこう思いだした。私たち2人[彼と彼の妻]にとって、日本で働くことは非常にストレスが多く、私たちの目的はペルーで事業設立するために十分に貯蓄することだけだった。しかし、私たちには健康問題を抱えて生まれた子供がおり、貯蓄が尽きてしまった。1997年に私たちはまた日本に行かなければならなかった。学校での問題により、2008年にペルーに戻ってきた。

日本で22年間過ごし2人の男児をもつ、2013年にインタビューを受けた別の父親は次のように述べている。

私が日本に滞在している間、私の家族や私の妻の家族も助けることができたことは私に満足感を与えた。残念ながら2011年3月の三重災害のために予期せずペルーに帰らなければならなかったため、私の節約目標を達成することができなかつた。

したがって、循環型移住は、労働市場に戻ることができない等祖国で物事が期待したように進まなかった場合の備えや、経済的・政治的危機、暴力の横行、自然災害などの外的イベントの際のシェルターとして利用できる、追加のスペースを第1世代の日系ペルー人に開いている。確かに、第1世代の日系ペルー人の日本への移住は、まさに1980年代のペルー経済の停滞の影響によって引き起こされた。これは、テロリストやゲリラグループが国を掌握したことによる政治的・社会的不安によって悪化した「失われた10年」としても知られている。一方で、最後の証言は三重災害とそれを取り巻く不確実性によって戻ってくることを決めた日系ペルー人の一例である。帰国は計画されておらず、結果的に彼は貯蓄目標を達成することができなかつたが、インタビューは妻と子供たちと再び暮らすことの重要性に気づく良い機会であったと考えている。

一部のメンバーが日本やペルーに滞在することで、循環型移住は家族生活を混乱させることが多い国を超えた世帯経済戦略の一部であり続けるが、またそのメンバーを再結束させるものでもある。その中断から生じる経済的または物質的幸福は、家族との距離に関係なく、世帯主の役割の実現に伴う精神的または道徳的幸福によって補われ

ると私の情報提供者は明確に述べている。しかし同時に、その家族の再会から得られる精神的または道徳的幸福は、故郷の家族を食わせることができず世帯主の役割を果たすことができないことに伴う経済的または物質的幸福の欠如によって損なわれる可能性がある。

第1世代とは対照的に、日系ペルー人の第2世代では、循環型移住が経済的な幸福ではなく自己実現の手段として最も顕著に現れている。したがって、彼らにとって自己実現は精神的や道徳的幸福の源ということになる。彼らの移動性はさまざまな方法でこれを追求することを可能にする。例えば、ペルーの高等教育機関に在籍している日系「帰国者」は、授業料のための収入を稼いだり兄弟の授業料の支払いを手伝ったりするために学期休暇中に日本に働きに戻る。

2011年にインタビューした25歳の女子大学生は、次のように述べている。

私と兄弟は夏休み毎に（1月から3月まで）日本に行き、日本の工場で働き、授業料を払うのに十分な収入を得、その上残りを貯蓄できる。たまに日本に行くというのもよい。

自分の大学は私立で、兄弟は公立大学だが、それでもまだ彼らは授業料を払わなければならないと彼女は説明した。彼女は14歳の時に日本を去りペルーに行ったので、彼女の日本語は中等教育レベルにすぎなかった。それ以来、彼女は日本語を話したり、読んだり、リマの日本人学校で語学クラスを教えたりすることで、語学力を保とうとした。それでも、彼女の言語スキルはどういうわけか失速していったため、彼女は日本では製造業やサービス業の低スキル労働者としてしか短期雇用を得ることができなかった。彼女は自分のスキルと経験によって、物質的幸福を求め、ペルーでの自己実現のためのプロジェクトを完成させるのに必要な資源を得るため、日本に行く循環型移民として特徴づけられる。彼女が日本語能力を向上させたり、日本で大学院の学位を取得したりした場合、両国を自己実現のための場にすることができる。

私のサンプル対象の中には、日本の高校や大学を卒業後にペルーに渡った若い「帰国者」という独特な事例もあった。そのうちの何人かはスペイン語を勉強していたか、または高等教育に入れら

れ、他の人たちはリマの異なる地域で働いていた。2011年にインタビューした28歳の男性の「帰還者」は言った。

ペルーで6年近く働いた後、私は自分の限界に達したと思う。そして私は人生で他のことをしなければならないように感じている。私はここ[ペルー]で成し遂げたことに非常に満足していますが、私の将来がどちらかの国にあることも知っています。そして今私はそこ[日本]に戻りたいように思う。多分私は日本の大学で勉強するだろう。

彼はペルーで生まれ、8歳で日本に行き、成人してから初めてペルーに戻った。2011年3月末、つまり三重災害の直後までに日本に帰ることを彼は計画しており、周囲の全員が反対したにもかかわらず彼はそれを実行した。日本で彼は1年近く働いた。後に彼は公立大学を卒業し、現在はポストクの2年生である。

これらのケーススタディが示すように、循環型移住は第2世代の日系ペルー人に自己実現のための国を超えた空間を提供し、そこでは彼らは自身の能力の積極的なエージェントとなり得、どちらかの国もしくはその両方でキャリアの道を築くことで、物質的または経済的幸福だけでなく精神的または道徳的幸福も得られる。

ペルーにおける彼らの「帰国者」、あるいは日本生まれや日本育ちの子供としてのアイデンティティは、日系人としてのアイデンティティを超越する方法で彼らの能力を調整することができる、日本とペルーの両方の社会での生活経験によって作り直された。そこでは、日系人としてのアイデンティティ—彼らがあまり親しんでいない、あるいはペルーでの彼らのアイデンティティを表していないと感じる概念—を超越する方法で彼らの能力を調整することができる。

結論

日系ペルー人移民は日本とペルーの間を自由に移動することができるため、理論上は、彼らは両国において経済的機会を利用することができる。実際には、第1世代と第2世代の日系ペルー人は、日本とペルーでの経験にかなり違いがある。これらの違いは日系の概念に結びつく意味に影響を与え、またアイデンティティ形成にも違いをもたら

す。第1世代の日系ペルー人にとって、日本にいることは日本の労働市場における低スキル労働者としての立場と同時に、彼らに経済的家計戦略としての出稼ぎ労働移民の循環性の法的枠組みを提供している日系人としての民族的アイデンティティと密接に関連している。ペルーに戻ると、たとえ言語を話し学位を持っていたとしても、彼らは労働市場で時代遅れの人的資源である。これら2カ国の機会を利用することを可能にする能力と保証書の欠如のため、多くの日系ペルー人の移住者は工場労働が生活の中心となる日本に留まることを余儀なくされている。彼らは物質的または経済的幸福の源として日本での滞在を経験する。彼らはまたペルーにいる家族のための精神的幸福と、世帯主としての期待される役割を果たすという自分自身のための道徳的幸福を達成することを通して、順番に日本で働くことで自宅に送金することができる。しかし、計画および意思決定の能力は限られているため、彼らは自身の循環性の受動的なエージェントである。したがって、第1世代の日系ペルー人たちは、どのような行動をとるべきかを選択するという範囲内でのみ活動的である。それでもほとんどの場合、彼らは自分たちの移動性を計画することができず、状況と両経済の浮き沈みに受動的に対応する。したがって、第1世代の日系ペルー人にとって、循環型移住はそれ自体が経済的な意味しか持たない単なる家計戦略である。彼らの欲求は市場構造に縛られており、その下で彼らはより良い人生を達成するための彼ら自身のやり方に対する限られた程度の支配しか持っていない。対照的に、第2世代の日系ペルー人にとって、循環型移住は自己実現のための手段として浮上しています。これは主に、日本とペルーの間の循環運動を維持するのに役立つユニークなスキルによるものである。両親の世代とは対照的に、たとえ彼らがこれらの国々への移民としての合法的入国の前提条件として当てにしているとしても、日本における自身の存在を理解するために日系条件に頼ることはない。ペルーに戻ると、彼らは日本社会と日系社会の生活の間にギャップを経験し、それによってポジティブにペルーでの日系人としての状況を受け入れることが非常に困難になる。そのため、第1世代の移住者が日系人と

その同義語である出稼ぎ、および低スキル労働者といった日本とペルーで互換的に使用されているものとして自身を識別した一方で、第2世代の日系ペルー人は、日本とペルーにおける日系人または出稼ぎの子供として自身を認識した。彼らは、ペルーにおいて日系人であることによる経験と常には一致せず、むしろ同じ立場にいる日本人と非常に似た経験を積んできた。日本の教育制度や日本社会への参加によって、第2世代の日系ペルー人は自己実現の手段を循環の中に見つけることを可能にするスキルと能力を習得している。

第2世代の日系ペルー人にとって、両国が自己実現の場所になり得る。なぜなら、同じ立場にいる日本人と同じ機会を持つ国で生活することによって、物質的または経済的幸福だけでなく精神のおよび道徳的幸福も見つけることができるからだ。彼らは有意義な方法で能力をうまく利用することができ、どちらかの国あるいは彼らの個人的な目標と重なる両方の国でのキャリアパスの可能性を開く。日本とペルーの間の移動は彼ら自身の欲求や価値観と密接に繋がっており、そのまま彼らは思い描いたより良い生活を追求し、勇気を奮うことができる。彼らは自身の循環の真のエージェントである。

本論文は、英語で以前出版された。

“Intergenerational circular migration and differences in identity building of Nikkei Peruvians,”

Contemporary Japan, Special Issue Squared Diaspora: Representations of the Japanese diaspora across time and space, 2017, Volume 29, Number 2, pp. 230-245.

謝辞

心を開き日本とペルーでの貴重な国境を越えた経験を共有して下さった若い「帰国者」とその両親に深く感謝します。彼らの貴重な協力なしでは、この研究は不可能だったでしょう。この研究に貢献して下さった全ての方々に個人的な感謝を表明したいと思います。特にペルーにある日系コミュニティ団体である、CEGECOOP La Unión、Colegio Peruano-Japonés Hideyo Noguchi、Colegio Peruano-Japonés La Victoria、Asociación PeruanoJaponesa (APJ)、Asociación Estadio La

Unión (AELU)、Asociación Okinawense del Perú (AOP)、Sociedad Japonesa de Auxilios Mutuos Chiclayo 及びそのメンバーの多大なるご協力に感謝申し上げます。

参考文献

- Agunias, D. R., & Newland, K. (2007) *Circular migration and development: Trends, policies routes, and ways forward*, Migration Policy Institute. http://www.migrationpolicy.org/pubs/MigDevPB_041807.pdf (2017年1月18日)。
- Agunias, D. R., & Newland, K. (2012) *Engaging the Asian diaspora. Issue in Brief, No. 7*, Migration Policy Institute. <http://www.migrationpolicy.org/pubs/engagingdiasporas.pdf> (2017年1月18日)。
- Cali, M., & Cantore, N. (2010) *The impact of circular migration on source countries. A simulation exercise*. <http://www.pardee.du.edu/sites/default/files/circular-migration.pdf> (2017年1月18日)。
- Castles, S., & Ozkul, D. (2014) “Circular migration: Triple win, or a new label for temporary migration?” In G. Battistella (Ed.), *Global and Asian perspectives on international migration. Global migration issues 4*, pp. 27-36. Springer International Publishing. http://www.springer.com/cda/content/document/cda_downloadaddocument/9783319083162-c1.pdf?SGWID=0-0-45-1472503-p176805946 (2017年1月18日)。
- Constant, A., & Zimmermann, K. F. (2003) *Circular movements and time away from the host country*. German Institute for Economic Research. Discussion Paper No. 390. The Institute for the Study of Labor. https://www.diw.de/documents/publikationen/73/diw_01.c.41109.de/dp390.pdf (2017年1月18日)。
- Fargues, P. (2008) *Circular migration: Is it relevant for the south and east of the Mediterranean?* Circular Migration Series. CARIM Analytic and Synthetic Notes 2008/40. <http://hdl.handle.net/1814/8391> (2017年1月18日)。
- Hugo, G. (2003) *Circular migration: Keeping development rolling?* Migration Policy Institute. <http://www.migrationpolicy.org/article/circular-migration-keeping-development-rolling> (2017年1月18日)。
- 法務省 (2017) *Statistics on entries and departures, and foreign residents in Japan*. <http://www.immimoj.go.jp/toukei/index.html> (2019年5月31日)。
- Newland, K. (2007) *Can migrants, countries of origin and countries of destination all win from circular migration?* Global Forum on Migration and Development (GFMD). https://www.gfmd.org/files/documents/gfmd_brussels07_csd_session_3_en.pdf (2017年1月18日)。
- Newland, K. (2009) *Circular migration and human development*, United Nations Development Programme Human Development Reports. Research Paper 2009/42 October 2009. http://hdr.undp.org/sites/default/files/hdrp_2009_42.pdf (2017年1月18日)。
- Newland, K., Agunias, D. R., & Terrazas, A. (2008) *Learning by doing: Experiences of circular migration*. Migration Policy Institute. <http://www.migrationpolicy.org/sites/default/files/publications/Insight-IGC-Sept08.pdf> (2017年1月18日)。
- Nussbaum, M. C. (2011) *Creating capabilities. The human development approach*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Sen, A. (1999) *Development as freedom*. New York, NY: Anchor Books.
- Vadean, F. P., & Piracha, M. (2009) *Circular migration or permanent return: What determines different forms of migration?* <http://www.kent.ac.uk/economics/papers/index.html> (2017年1月18日)。
- Zapata-Barrero, R., García, R. F. & Sánchez-Montijano. (2012) *Circular temporary labour migration: Reassessing established public policies* (Vol. 2). International Journal of Population Research. <http://downloads.hindawi.com/journals/ijpr/2012/498158.pdf> (2017年1月18日)。
- Zimmermann, K. F. (2014) *Circular migration, why restricting labor mobility can be counter-productive*. IZA World of Labor: 1. <http://wol.iza.org/articles/circular-migration/long> (2017年1月18日)。

Intergenerational circular migration and differences in identity building of Nikkei Peruvians

SUEYOSHI Ana

Abstract

This study analyzes the motives of first and second generations of Nikkei Peruvians for circular migration between Japan and Peru. Adjusting their expectations with the economic demands of each country creates a circular movement that is associated with triple-win outcomes. However, while for the first generation, circular migration is a household economic strategy that allows migrants to fulfill their role as breadwinners and provide material well-being to their families, for the second-generation circular migration offers a venue for building their professional careers and for self-realization.

Migration movements therefore serve not only as a source of material or economic well-being, but also of emotional and moral well-being. The first generation shows a passive attitude by adjusting themselves to the ups and downs of the global economy and changes in the division of labor, while the second generation actively draws on language competence and professional skills to become agents of their own mobility. The difference between these two generations influences how each group perceives each country and the processes of identity building in each group.

(2019年5月31日受理)